

したものは DFO 投与により集積 pattern, RI 集積比とも正常化した。以上, 骨シンチグラフィは ROD の骨病変の把握や経過観察に有用であることが示された。

19. ¹¹¹In Bone marrow scintigraphy における marked renal activity の意義について

新屋 晴孝 平木 祥夫 藤島 謙
戸上 泉 竹田 芳弘 佐藤 伸夫
村上 公則 西原 忍 上者 郁夫
青野 要 (岡山大・放)

造血器疾患 42 症例に対し, ¹¹¹In-Cl₃ 骨髄シンチグラフィにおける腎への高集積の意義について検討した。

1) 腎高集積群の骨髄機能は低下が示唆されたが, 腎非集積群との間には, あまり有意差を認めなかった。

2) 腎高集積群は, 腎非集積群よりも有意な UICB 値の低下を認めた。

3) 腎高集積群と腎非集積群との間で, BUN, Cr は有意差を認めなかった。

腎への集積は, 骨髄機能の程度よりも, 鉄結合能飽和度との関連が強く, 鉄結合能飽和度の高い症例で, 腎高集積が多くみられた。

20. 各種 ^{99m}Tc 標識コロイドの骨髄集積性に関する基礎的検討

大塚 信昭 福永 仁夫 小野志磨人
永井 清久 村中 明 柳元 真一
友光 達志 森田 陸司 (川崎医大・核)
西下 創一 (同・放)

各種 ^{99m}Tc-コロイド (^{99m}Tc-Sn, phytate, sulfur colloid (SC), Antimony sulfide colloid (ASC)) の骨髄集積性につき, 基礎的に検討し, 次の結果を得た。

標識率は調整後 6 時間では Sn がやや劣るものの, 他は 99% の標識率を認めた。

血中残存率は T 1/2 は Sn で 4.8 分と最も優れ, SC で 1.5 分であり 30 分後の残存率でも SC が 1.8% と少なく, ASC でも 9.0 分であった。

家兎組織内分布では, Sn は投与量の 71.7% で肝, 骨髄で 7.4%, phytate で肝に 57.3%, 骨髄に 9.2%, SC で肝で 82.0%, 骨髄で 10.3%, ASC で肝で 65.3%, 骨髄

で 21.3% と ASC が骨髄へもっとも高く集積がみられた。シンチグラム上も ASC は SC に比して骨髄スキャン濃度が高く, 30 分以内では膀胱は描出されなかった。

^{99m}Tc-SC は骨髄内集積が高く, 投与後 30 分で膀胱が描出されず, 既存の ^{99m}Tc-コロイドのうちでは優れた骨髄スキャン剤であるが, ASC も優れた骨髄スキャン剤と考えられた。

21. VX-2 担癌家兎における高カルシウム血症の成因の検討: 骨シンチグラフィと photon absorptiometry による評価

福永 仁夫 大塚 信昭 小野志磨人
永井 清久 村中 明 古川 高子
柳元 真一 友光 達志 森田 陸司
今井 茂樹 西下 創一 (同・放)

進行した末期の悪性腫瘍では高 Ca 血症の合併は, まれではない。今回われわれは VX-2 移植家兎における高 Ca 血症の成因を, 核医学的手段, つまり骨シンチグラフィと Single photon absorptiometry による骨塩量測定により評価を加えた。

VX-2 担癌家兎は移植 4 週目に高 Ca 血症を呈したが, サケカルチトニン (SCT) 投与群では高 Ca 血症の発現を抑制した。Single photon absorptiometry による骨塩量測定では VX-2 移植側の大腿骨の骨塩量は正常家兎に比して明らかに低下していたが, SCT 投与群では骨からの Ca の脱灰を予防できた。

骨シンチグラフィによる RI uptake ratio の検討では, 高 Ca 血症を呈した家兎では移植側の大腿骨ばかりでなく, 全身の骨への強い集積が認められた。

22. ¹³¹I, ²⁰¹Tl による甲状腺癌の転移巣の検索について

川瀬 良郎 瀬尾 裕之 宮本 勉
日野 一郎 佐藤 功 児島 完治
高島 均 玉井 豊理 田辺 正忠
(香川医大・放)

香川医科大学で甲状腺全摘後分化型腺癌に対するヨード内用療法施行時に行われてきた RI 検査 (¹³¹I 3 mCi シンチ, ²⁰¹Tl シンチ) の転移巣検出における有用性を